

七人の墓友 俳優座 劇団



【二〇〇代】

▼展開からは軽いように聞こえる「同じ墓には入りたくない」です

が、長くつれそつたからこそ根の深さを感じました。夫婦は他人だけど一番近い他人：という、私の好きな本のフレーズを思い出しました。(女性)

【四〇〇代】

▼お母さんが「お父さんと同じ墓に入りたくない」という言葉をきっかけに、家族がお互いを理解していく姿が良かったと思います。(女性)

【六〇〇代】

▼舞台がシンプルで、共同墓地をイメージしていると思ったら、ぜんぜん違い一人で笑ってしまいました。二三列と後列でしたが、俳優さんたちの声がよく聞こえました。(女性)

▼チラシの不気味さとは裏腹・真逆な、家族と友情の物語。人と人とのつながり、夫婦、兄弟、パートナーをみせる。(女性)

▼サンドアートお見事でした。最後の場面のガンコ親父の「ありがとう」にウルツとききました。前から二列目で感激!(女性)

▼自分がもし妻から「あなたと同じお墓には入りたくない」とある日突然言われたら、ショックだろうなと思う。しかし、この芝居に出てくる「樹木葬」については理



解できる。台本が良く出来ており、出演者の演技もしっかりしていたと思う。身近な問題だけにいろいろと考えさせられた。(男性)

▼「墓友」が生まれた背景が重要ではないか。社会構造の変化、家制度の崩壊?それは生き方の問題とも重なる。世間の「常識」という名の押しつけは許されない。たとえ夫婦、家族であっても、「個人として尊重される」ことの本質を忘れてはいけない。「家族は大切、助け合って」。否定はしない。けれど国家がこれを言いだしたら危険である。でも聞こえてくる。戦前回帰への足音のように。(男性)

▼「墓友」という言葉を初めて知った。「血縁」から「結縁」へ。。。お一人様の私にとって身につまされる芝居だった。良かった。(男性)

【七〇〇代】

▼自分とは遠い話題なのに、身近に感じたのは、役者さんの力量なのか。劇中の母が私の母と重なっ

て夢を見ているようだった。(女性)

▼せりふの一つ一つにドキリとした。自分らしく生き切る為のヒントが沢山あった。現代を様々に表現している。(女性)

▼心のどこかに漠然とあつた葬送に対する違和感を舞台でくつきりと見せて戴いた気がする。これがお芝居の良い所。(女性)

▼「サンドアート」が「墓友」という暗いイメージの題名をかき消す。生きること、そしてやがて迎える死を考えずにはいられなかった。(女性)

▼終演後、会員の皆さんの顔がいつもより明るくにこにこしていたように思えます。おかあさん、がんばりましたよね。隣にいたつれあい(夫)がどんな気持ちで観ていたか、聞くのはやめました。(女性)

